

H24.01.24「不誠実で厚顔無恥、野田総理の所信表明」

こんにちは、参議院議員の西田昌司です。今日は1月24日です。昨日から第180国会が始まったわけですがけれども、昨日の野田総理の所信表明演説、これは本当にひどいものでした。私もこの演説の内容を聞いていて、本当に吐き気を催すほどの気分の悪さ、気持ちの悪さを感じました。野田総理は、今回の国会で消費税、それから税と社会保障の一体改革を提案していきます、いま日本の状況はまったなしですから、ぜひ野党のみなさんにも協力してほしい、ということをおっしゃっていたのですが、その際、福田元総理、麻生元総理の政権時の発言を取り出して、自民党もあの時代に同じことを言っていたのだから、ぜひ協力してほしいと、このように言っていました。

自民党もかつて同じことを言っていたのだから、協力してほしいということですがけれども、問題は、自民党政権の時に民主党はどういう対応をしていたかということなのです。自民党がかつてから、消費税増税や、税と社会保障の一体改革の必要性を言っていたことは事実です。そういう意味で、政策の方向性としては自民党と民主党で対立点はないのです。しかし、民主党が野党の時には、自民党がいくらそのような話を言ってもその必要はない、とやってきたわけです。福田さんの時代は、税と社会保障の一体改革をやらないと大変だ、ということで小沢さんと連立内閣を作ろう、という話になったのです。それをけしからんと言って、当時の民主党の野田総理や前原さんといった方々が、その

決定をよしとせず、彼らが猛反対したため小沢さんとの合意はなくなってしまったのです。自分たちの掲げるマニフェスト以外のことはやらない、とあの時言っていたのは誰だったのか、マニフェストに書いてないことはやらない、連立なんてできないのだと言って、否定したのは野田さん本人なのです。しかし、そのことの反省が今の彼に全くないわけなのです。

税と社会保障の一体改革を実現するためには、自分たちがまずかったということをちゃんと言わなくてはならないのです。ところが、一点の反省もなければお詫びもない、普通こういうことをやる場合でしたら、事前に幹部の方が、雁首そろえてそれぞれ野党の代表者のところにまわって、大変申し訳ないということをちゃんと説明しなければなりません。それを受けて、党内で、それぞれの政党が、それではそこまで反省をして、本当に悪かったということを詫びるのであれば、話し合うということもあるかもしれません。ところが、彼らにはそれもないわけです。いきなり言っているわけです。それはまさに手続き的にもおかしいし、反省のないところで税と社会保障の一体改革と言うなんて、まさに不誠実な、反省なき厚顔無恥、と言わざるを得ないのです。これがまさに野田政権、民主党政権の本質を表しているわけで、非常に幼稚な話を言っているわけです。

彼らのように自分たちは政策を変えたから、それに乗ってほしいというのは子どもの論理としてはそうなるかもしれないけれども、まともな大人の社会

では、そういう論理は通用しません。大人なら、大人としての責任を誰がどこで取るのかということを、自分たちがもし本当に、まともな人間だと言うならばその責任をきっちり取らなければならないということですが、そのことを彼らは全く分かっていないのです。

これは本当に問題なのですけれども、問題は民主党だけではなくて、マスコミそのものです。マスコミがその問題について、テレビなどを見ていると、「自民党もかつて言っていたのだから話し合いをしてほしいですよ」という話になっているのですが、本当にまったくもう、どの面下げて言っているのか、という話なのです。特に、マスコミそのものが、選挙前、民主党のマニフェストを一度やらせてみればいいのか、ということで後押しをしていたのです。そもそも民主党というのは、マスコミが選んだ政権なのです。その作った政権がやっぱりまずかったというのは、あの民主党や野田さんの問題はもちろんだけれども、マスコミ自体に大きな問題があるのです。だから本当は、マスコミの責任者たちにも同じ反省をしてもらわなければならないのです。しかし、彼らは未だに高見にとまっているのです。一遍やらせてみたけれども、民主党はやっぱり駄目だった、でもまあ、ダメなところを直してやらせてみる以外ないじゃないか、とこういう話で、つまりマスコミは高みから、彼らを操っているつもりでいるのだけれども、そういうマスコミこそが一番問題なのです。

私は今回のこの民主党の問題点は、基本的に民主党の問題であると同時に、マスコミの問題でもあると同時に、マスコミをはじめとする日本人の精神のだらしなさがここに表れているわけです。つまり、政治というのはどこまでいっても国民の問題ですから、誰かにやらせればいいのか、一方的に批判をしておけば、それで済む問題ではないのです。結局、国民がそういう無責任な行動をしていると、すべて結果は国民に降りかかってくることになるのです。だから、真剣に考えなくてはダメなのです。私だって、いくら誰がどう言おうと、ダメなものはダメだと、野次を飛ばそうがなんだろうが、真剣にその場にいれば、誰もが当たり前のことをするはずなのです。それで、私は批判を受けることをあえて承知でやっているのは、まさに国会の場で、一人の政治家として、人間として真剣に生きているからなのです。高みにいて、自分たちはまったく何の責任も負わず、好きなコメントを流して、もう一度、一緒に話しあいをすればいいじゃないですか、というようなことを、それぞれ政党の役職者に偉そうにいつているマスコミの方々に、私は本当に腹立たしい気持ちであります。

結局、なぜそういう風になっていたのかと言うと、これは戦後社会そのものの問題です。つまり、この戦後社会というのは、一方的に過去を断罪して、とにかく今我々は過去を否定していれば全ていいのだ、民主主義万歳で、何かあればその責任は全て政治家に負わせればいいのだ、選挙に言って投票すればいいのだ、というこの程度の認識しか、この社会には無いわけです。そして、

これを作り出しているのは、まさにマスコミであるし、もっといえば、マスコミはこういう社会を作ることが自分たちの使命とすら思っているのです。しかし、これはまさに、思い上がりもはなはだしいといわなければなりません。「君子自反する」という言葉があります。自反するとは自ら省みる、すなわち自らに反えるということですけれども、それなりの立場にある方ですと、自ら常に自省、疑問をして、自分の言葉に誤りはなかったのか、どうだったのかということ謙虚に受け止めて、活動していかなければならないのです。けれども、今のマスコミには全くその言葉がありません。民主党にも、もちろんありません。そして戦後の社会そのものにそれがないわけです。

私は何度も言っておりますけれども、この戦後の社会を作ってきたのは自民党であるわけです。ですから、自民党にその責任の多くはあるわけです。つまり、戦後の自民党といいますのは、ある意味で言いますと、まあ、保守政党といいながら、過去の否定によって、戦後の民主主義に便乗するところから始まっている。これは、戦後社会がサンフランシスコ体制の延長線上にありますから、それを肯定しないと仕方がなかったところがあります。しかし、平和憲法を初めとする、その法律の体系やその価値観を本当はおかしいと思いながらも、肯定する形で、政治、教育、社会の現場で見ていくとどういうことになるか。政治の現場では、自分たちの国を守る、そのためには自分たちで汗も血も流さなければならないし、過去の戦争の経緯についても、国民にもう一度あれ

はなんだったのかという、歴史的な反省、歴史観の立て直し、これが必要だったのです。けれども、これを全くしないで来てしまいました。結局は、政治の課題と言うのは、東西冷戦という構造のおかげで大きな戦争がない、だから安全保障よりも経済だけを考えれば良いということになってしまった。同じく経済は、エコノミックアニマルと言われるように、とにかくお金儲け、それが一番の価値になってしまった。そして、戦後の教育で言いますと、自分たちの国を守るとか、家族を守るといった自分たち自身の責務は横に置いておいてしまって、とにかく自分たちは何か要求、要望をすればいいのだということだけの利己主義者を肯定するような中で、長い間教育をしてしまった。そういう環境の中で育ってきた人間であり、さらには戦後のエリートであるのが民主党の政権についている方々なのです。

つまり、自分たちが野党の時、与党の時もそうです、好き放題、無責任な言論を並べているけれども、それに対して恥じ入るという感覚が全くないのです。昨日の野田総理たちの発言、演説と言いますのは本当に、今思い起こしても気持ちが悪いのですけれども、そのことを全く恥じていないのです。当然、私は厳しい野次を飛ばしましたが、彼らに対してはもう同じ空気を吸っているのも嫌だというくらい、反吐が出そうな不快感を感じたのです。まさに厚顔無恥、そして不誠実、この権化のような姿であるわけですがけれども、醜い醜惡なものです。このような方々と、もう我々は絶対に議論できないのです。

まず、そのことを国民に知っていただかなければならないのですけれども、マスコミ自身がまさに、そういう体制の中にいる一番張本人なわけですから、マスコミを通じて知らせるのは結局無理です。ですが、民主党政権とその両輪となってきた経済界やマスコミはいずれ滅びるしかないのです。そして、そのことが本当に、まずかったという大反省のもとでしか、日本の復興というものはありえないと思っております。そういう意味で、間違いなく今年は選挙になるでしょう。しかし、その選挙というのは、何が争点か、消費税と、税と社会保障の一体改革なんか、これは争点でもなんでもないのです。まさに、自民政権の時代からやらなければならない、と言っていたことです、当然これは選挙の後やります。しかし、その政策の問題一つ一つに対して、自らの責任に対して責任を持たない、言っていた言葉に責任を持たないどころか、何も恥じ入るところなしに、相手の政党が言っていたことにそのまま抱きついて、抱きつかれた側がそれに応じないのはおかしいなどと言っている人間が政界の中央におり、それを擁護するマスコミばかりでは、日本の政治はどうしようもないわけです。こういう方々を一掃することが、この選挙の意味です。それは多分、一回や二回では無理でしょう。しかし、我々が本気になって、今後の社会の在り方を考えたときに、この問題点を改めない限り日本人は救われません。

私は、昨日の演説を聞いて、ますますこのことを感じたわけですが、おそらく今後とも孤軍奮闘ということになるのです。しかし、このビデオレター初

めとして、今はインターネットなど我々一人一人が自分の意見を発信できる仕組みが存在します。私も、自分の生のある限り、覚悟をもって取り組んで参りますので、ぜひ上記のようなことを拡散していただきたいと思います。そして、マスコミを見ている場合じゃない、くだらない政治家の話に耳を傾けている場合じゃない、自らが考え、自らが行動していこうという考えに共感して頂ける方とともに、私も一所懸命に研鑽に勤めながら頑張っ参りたいと思います。今後ともひとつよろしくお願いします。

ありがとうございました。